

日本YMCA基本原則

私たちは日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をととして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2016年10月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円(外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: http://www.ymcajapan.org/
発行人/島田 茂 編集人/山根 一毅
印刷/あかつき印刷株式会社

難民のために、 難民とともに

認定NPO法人難民支援協会
代表理事
石川 えり



多くの隣人同士が殺し合い、難民として逃げた先でも命を落とした。ルワンダの内戦。この危機的な状況を報道で見た1994年、高校生だった私は衝撃を受け、何かできないかと考えました。故郷を逃れざるを得ない人たちの力になりたいと思い、NGOでボランティアを始め、凶らずも日本へ難民として逃れてきた人たちに会いました。「行かなければと思っていたルワンダからの難民の人たちが目の前にいる」と知って以来、日本の難民支援に関わり、1999年に難民支援協会を設立、現在に至ります。

「シリアに暮らしていたが、自宅と勤務先が爆撃された」「政府から禁止されている宗教の信者であり信仰維持が困難である」「イスラム教徒である自分たちの民族は市民権を剥奪された。帰る国もない」……。

日本にもこのように自分の命の危険を感じて逃れてきた人たちが、難民がいます。世界で6,000万人を超えるといわれる移動を余儀なくされた人たちの総数に比べたら多くはないですが、それでも現実に来日し、助けを求めているのです。日本で「難民」に認定されるためには審査が必要ですが、平均で3年間という長い時間を要します。加えて最低限の生活保障もなく、来日後後に所持金が尽きてホームレスとなる人もいます。日本社会の中でなかなか受け入れられず、排除されているようにも思えるこの状況は、生きづらいと感じる人が増えている私たちの社会全体の課題とつながっているように感じます。

昨年1月末、成田空港で妻、2人の子どもと2年半ぶりに再会し、「日本で夢がかなった」と涙を流すシリアからの難民、ジュディさんの姿がありました。2歳半の長男とは、妻が妊娠中にシリアを逃れたジュディさんにとって初対面となりました。

ジュディさんは、母国でアサド政権に反対するデモに参加したことがきっかけで政権に狙われ、2012年夏に故郷を後にしました。その後、情勢はさらに悪化し、IS(イスラミックステート)の台頭により妻と子どもたちは隣国イラクに避難、国境沿いの難民キャンプに身を寄せました。ジュディさんは、本当は兄弟のいるイギリスを目指したのですが、偶然が重なり日本へ。しかし難民としては認定されず、家族を呼び寄せる道も閉ざされてしまいましたが、諦めずに関係者へ働き掛け、家族の来日がかないました。

「子どもたちのことを考えると夜も眠れない」と話していたジュディさんは、ようやく家族と再会することができましたが、来日当時2歳と5歳だった子どもたちは、今も「警察」や「軍隊」という言葉を耳にすると、小さな肩をビクッとさせるそうです。

命の危険にさらされていた故郷から、安全な国である日本が受け入れ、家族一緒に暮らせることは、この国が提供できる大切な価値でもあります。政府だけが受け入れるのではなく、雇用環境や大学・日本語学校を通して、民間を中心に受け入れていく道もあります。

多くの難民は、社会に貢献したい、地域社会とつながって生きていきたいという希望を持っています。東日本大震災の後、仲間と共に募金活動をしたり、被災地へボランティアに出向いたりした難民が多くいました。彼らの「何かしたい」という思いは、母国に帰れないからこそ、自らが日本社会の一員なのだという、強い意識と責任感に根差しています。

難民を日本へどう受け入れ、そして彼らとともにどのように社会をつくっていくのか、難民とともに、皆さんと考えたいと思います。

ラポール

相手と向き合って心を合わせていくこと。(仏語:親和・共感的関係の意)

「地は混沌であって、闇が深淵のおもてにあり、神の雲が水のおもてを動いていた。」(創世記1章)

関西学院大学教員
ジェフリー・
メンセンディーウ

仙台で働いていたある日のこと、私は東北大学の学生さんたちと、天地創造物語を読んでいた。聖書箇所の説明を終えると、ある学生が手を挙げました。

「なぜ、神様の物語(聖書)は混沌で始まるのですか?」

創世記1章で神様は混沌の中から世界を形づくっていきます。光と闇を分け、天と地を分け、陸と水を分け、生き物に名前を与え、最後に人間を造ります。その学生は聖書の最初に出てくる「混沌」という言葉に目を付けたのでした。

それは、ちょうど東日本大震災から2カ月ほどがたったころ。仙台市中心部から自転車で40分ほど走ると、まだ津波の傷痕が生々しく残っていました。直接被害に遭われた方々もそうでしたが、市街地に住む私たちもとても不安定な日々を過ごしていました。そのような時期だったこともあり、この学生の質問は深く私の心に留まりました。

数日後、私はボランティアとして沿岸部で働いていました。目の前に広がる風景は混沌

そのものでした。冷蔵庫、洗濯機、車、写真立て、こたつ、テレビなど……誰の物かも分からない家庭用品が一面に転がっている状態でした。ボランティアに入ったお宅の方の指示の下、私たちは取っておく物と捨てる物とを仕分ける作業をしていました。その時にふと、あの学生の質問を思い出したのです。

「なぜ、神様の物語は混沌から始まるのですか?」

今、こうしてボランティアが被災地に駆け付け、地元の人と共に少しずつ物を仕分けながら、新しい秩序が生まれている。私たちはこの混沌とした大地に立ち、人の温かい心によって、混沌とした風景に秩序が与えられつつある。そして、その営みの中から生きる希望が湧いてくる。私は、これこそが神様の物語の始まりではないかと思ったのでした。

人間の手によってつくり出された秩序が壊され、私たちの限界が示された時、そこから神様の物語が始まるのではないのでしょうか。謙虚になって一歩ずつ歩き出すところから、神様の希望と癒しの物語は始まるのです。

私たちの隣にいる難民と 明日の社会を共につくるために

連帯とエンパワーメントードイツの難民支援のために

ドイツYMCA

ドイツYMCA 難民支援タスク議長 ドロシー・プフロマー

統計によれば、世界の難民問題はかつてないほど深刻になっていますが、故郷を追われ、自身のルーツを失うという試練に直面している一人ひとり、掛け替えない命です。ローラ（21歳）は強制結婚から、モジタバ（28歳）は宗教上の迫害からドイツに逃れてきました。

2015年、ドイツは100万人以上の人びとを受け入れました。そのほとんどは難民申請を行いました、3分の1は子どもと若者で、多くはシリア、アフガニスタン、エリトリア、イラクなどから、家族と別れて来ています。多数の難民申請者を前に、住居など日常のニーズにどう対応するかといったさまざまな課題がドイツ政府に突き付けられました。

そこで、自分たちができることをしようと、多様な背景を持つドイツ市民がボランティアとして立ち上がりました。ドイツ語のコースやフリータイムに参加できる活動で、難民を支える動きを始めたのです。

ドイツYMCAも迅速に動き出しました。地域のYMCAが連携し、個々のニーズに応じた支援、地域センターや近隣のキャンパスサイトでの子どもプログラム、寄せられた衣類や自転車など、日常の必需品の提供といった活動をボランティアが始めたのです。中には、身寄りのない若者が暮らすコミュニティや、難民家族が生活する場づくりを始めたYMCAもあります。

ドイツYMCA同盟は委員会を設置、支援活動のコーディネートや内容の共有を行い、また5つあるゲストハウスの一つを、来たばかりの難民のシェルターに提供しました。ドイツYMCA国際大学はボランティアだけでなく、難民をまとめる役割を担うスタッフ

にもトレーニングを行いました。集めた寄附で、今年9月には移民・難民350人を対象とした教育も始まりました。

私たちは、世界にネットワークを持つ青少年団体であり、キリスト教を基盤とした運動体であるYMCAの一員として、特に若者たちが未来を思い描けるようにエンパワーしてまいります。

今、一人ひとりの声なき声に耳を傾けましょう。服を差し出し、仕事に就けるよう励ましましょう。食事を分け合しましょう。ドイツYMCAは、難民と、そしてまだ会ったことのない人びとの祝福を願います。なぜなら、神はすべての人を愛しておられるからです。

※ドイツYMCA同盟には13の地域に分かれた2,200のYMCAが加盟、33万人の会員と6万人のボランティア、840人のスタッフが所属しています。



キャンプサイトでボランティアと遊ぶ難民の子どもたち



ドイツYMCA同盟のゲストハウスに集った難民たち



ドイツ料理で歓迎(ライヘンバッハYMCA)

「YMCA国際協力募金」による難民支援

平和な暮らしの実現のために

学び、働き、遊び、語り、共に食す。そんな当たり前の暮らしを誰もができる平和な社会の実現を願って、全国のYMCAやワイズメンズクラブを通して寄せられるYMCA国際協力募金がパレスチナとアフガニスタンの難民支援に用いられています。

パレスチナでは、イスラエルとの紛争によって住む場所を追われたり職を失った人びとのために、職業訓練やオリーブの苗木を植える活動を支援しています。

また、パキスタンに逃れたアフガニスタン難民の子どものために、パキスタンのラホールYMCAの学校運営を支援しています。遠くに暮らす困難な状況の中にある人びとの、喜びや痛みを思いを寄せ、平和な社会の実現のために国際協力募金を用いています。



アフガニスタン難民の子ども約80名が学ぶ、読み書き計算の修得によって自分や家族を危険から守り、安定した将来の生活につなぐ

※オリーブの木キャンペーン……パレスチナのYMCAとYWCAが行うオリーブ植樹プロジェクト。農民たちの生計を支え、イスラエルから土地を守る活動。1本3,000円でオリーブの苗木を贈ることができます。

「YMCA国際協力募金」は国際協力・地域奉仕活動に用いられます。
・困難な状況の中でも、子どもが元気で学校に通い、遊べるように
・災害で被害を受けた人が安心して暮らせるように
・地域や社会のためにユースが活動できるように
・平和を創り出し、大切に育む気持ちを育てるために

（YMCA国際協力募金のリーフレットに、活動内容を記載しています。）

神戸YMCA

地域の皆さんと、学びの場を共有しています

難民の皆さんが日本で生きていくには、日本社会の理解が不可欠です。祖国に帰ることができない、パスポートがないためさまざまな困難がある、といった難民特有の事情と、それ以外に「外国人」が日々感じる異なる文化や言語の中で苦勞などを知っていただくため、神戸YMCAとアジア福祉財団難民事業本部は連続セミナー「わたしたちの難民問題」を1997年にスタートさせました。支援関係者、ジャーナリスト、研究者、そして難民の方自身が講師となったワークショップで、2000年からは参加型プログラムを独立させた「ワークショップ」を開催しています。



難民と日本人、アパートでの話し合いをロールプレイ

私たちはできることは何か、ワークショップで考える
神戸YMCA国際委員 中尾秀一



ベトナムの民族衣装、アオザイに身を包んで

日本で「難民」と認められている人たち

日本に逃れて来た難民のうち、日本政府は1978〜2015年、1万1,424人を「定住難民（インドシナ難民・第三国定住難民）」として、また難民認定申請者3万1,455人のうち660人を「認定難民」としています。申請手続きをしても、日本で難民認定される人は非常に少ないのが実情です。

※「認定難民」は、法務省入国管理局ウェブサイトより、定住難民が後に認定難民となった場合を除き、数に重複もありません。

日本への難民申請者は年々増加傾向にありますが、2015年はネパール、インドネシア、トルコをはじめとする69カ国から7,586人、そのうち難民として認定された人は72人、また難民と認定されなかったものの、人道的配慮により在留が認められた人は79人でした。

2015年の難民認定数の国際比較は、以下の通りです。

国	認定数(人)
ドイツ	138,666
米国	23,361
フランス	21,287
英国	15,376
イタリア	3,573
韓国	40
日本	27

（データ提供: UNHCR-認定NPO法人難民支援協会）

第三国定住難民
最初に避難した国では保護を受けられない難民を、別の国が受け入れる制度により、(母国、一次避難国に次ぐ)第三国の保護を受けることができ、長期的な滞在の権利が与えられた人びと。日本は2010年から、アジアで初めて第三国定住受け入れを開始しました。

インドシナ難民
ベトナム戦争終結の前後に、社会主義に体制が移行する中で迫害を恐れ、インドシナ三国(ベトナム・ラオス・カンボジア)から逃れた人びと。日本は1970年代後半から、1万人以上を受け入れてきました。

認定難民
入籍法の規定に基づき認定された人びと。現在、認定審査には平均2年半から3年、長い場合は5年以上かかりますが、認定されると迫害の持つ母国に送還される恐怖から解放され、日本で暮らすことができます。
一方、難民認定を受けられなかった場合は、母国に強制送還される人、人道的理由から滞在が許可される人、再び申請する人などそれぞれです。

紛争や人権侵害などから自分の命を守るために故郷を追われて来る「難民」と呼ばれる人たちがいます。

難民というと、遠い国や地域で苦しみのさなかにいる人を思い浮かべがちですが、さまざまな理由で逃れて来た人たちが、日本にもいます。遠く離れた祖国では仕事や家族があり、家族との日常があった人たちが……私たちが隣にいる難民に気付いているでしょうか。

彼らは自立し、社会の一員となることを願っています。しかし、言葉の壁はもろろのこと、就労や子どもの教育といった生活・経済・法律面でのさまざまな壁が立ちほだかり、それゆえ孤独を抱えています。

私たちに、彼らの声は聞こえているでしょうか。

「日本YMCA基本原則」にあるように、私たちは、二人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざしています。

日本には、アジア、中東、アフリカなど世界各地から多くの難民が逃れてきています。自分の信仰を貫き守ろうとした人、独裁政権に反対するデモに参加した人、少数民族に属する人……。さまざまな理由から、母国で迫害を受けたり、迫害を受ける危険にさらされ、国を追われた人たちがいます。

隣にいる難民の生きる権利を守ること、そして、彼らと共に平和な社会をつくること、私たちがYMCAが果たすべき一つの使命です。

ここでは国内のYMCA、そして多くの難民を受け入れるドイツでのYMCAの取り組みを紹介いたします。

※日本YMCA基本原則は、本紙1面下に掲載されています。

横浜YMCA

子どもたちは毎日、多文化の中を生きています

近隣の国にインドシナ難民など多国籍の人びとが暮らすYMCAの保育園には、いろいろな国につながる子どもたちが在籍しています。現在、ベトナム、中国、カンボジア、ウガンダにつながる子どもたちが約2割、ベトナム、ペルーにつながっている子どもは約3割、文化背景を持った友達や大人を、自然に受け入れて生活しています。

日本の子どもたちがいるような国の文化に興味、関心を持っているように、また、日本以外にルーツを持つ子どもたちが母国の文化に誇りを持っているように、という願いから、月1回「世界の料理の日」を設け、給食でいろいろな国のメニューを取り入れています。今までベトナム、ペルー、中国、カンボジアの料理を紹介してきましたが、8月はペルーのリール、中国、カンボジアの料理を紹介してきましたが、8月はペルーのリール（ひよこ豆とひき肉のトマト煮こはん）、パパラカンカイナ（ジャガイモのチーズソース）、マサマラモラダ（シナモン風味の紫トウモロコシのゼリー）を原食とおやつに出しました。食べる前にペルーの国の話を聞き、「おいしい」をスペイン語で何と言ったかを教えてもらった子どもたちは、初めて見る紫色のトウモロコシや、シナモンの香りに興味津々で顔を近づけていました。これからも、さまざまな国の文化に触れ、その文化につながる人への関心と理解が育まれていくことを願っています。

1 取り組み紹介！
月に一度は「世界の料理の日」
YMCA 保育園 スタッフ 島田真理



8月は、ペルーのごはん



「Rico(おいしい)!!」ペルー出身のリリアン先生と、マサマラモラダを食べる子どもたち

ベトナムから、平和と自由を求めて

2 サポーター紹介！

トルオンティトウイチャン

私が13歳になるころ、南ベトナム政府は無条件降伏を発表、ベトナム戦争は終結しました。南ベトナムで父は軍人をしていたので、私たち家族は北からの迫害を逃れて生き延びるために、手作りのボートでメコン川を下りました。100人ほどが乗る大きな船に乗り換え、検問で見つからないように身を潜め、やっと公海に出ることができましたが、その時の私たちに「目的」がありませんでした。もう母国もオランダの貨物船に助けられた私たちは、日本を受け入れられる地を求めました。幸運にもオランダの貨物船に助けられた私たちは、日本を受け入れられる地を求めました。難民センターに着いた時、チャン、君はどうしても見せたいものがある」と言われて、父が見せてくれたのは近くの公園の風景でした。お弁当を食べる家族やスポーツをする人たちが……。そこには、平和と自由がたっぷりありました。

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●「第40回全国YMCA少年少女水泳大会」を開催——全国YMCA

8月10～11日の日程で、第40回全国YMCA少年少女水泳大会が広島市総合屋内プール（広島ビッグウェーブ）にて開催されました。今回は全国YMCAの20の拠点から187人の参加者が集う大会となりました。地震の被害に見舞われた熊本からも熊本YMCAの3拠点が参加し、12人が出場しました。



熱いレースが展開され、10の大会新記録が生まれた

競技は、個人種目の自由形、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライと個人メドレー、団体種目のメドレーリレーとフリー（自由形）リレーを年齢区分ごとに実施しました。参加した子どもたちの懸命な泳ぎによってリオデジャネイロオリンピックにも引けを取らない熱いレースが展開され、10もの大会新記録が飛び出しました。

また、個人の記録以外に団体でも順位を争いましたが、男子団体総合1位：京都、2位：広島福山、3位：埼玉所沢、女子団体総合1位：京都、2位：広島中央、3位：大阪桃の里という結果になりました。団体総合では1位：京都、2位：広島福山、3位：広島中央となり、団体総合1位の京都は8連覇を達成しました。

今回の大会は平和都市広島での開催ということもあり、平和について考えるきっかけにしてほしいとの願いから、千羽鶴を作成しようという呼び掛けを行いました。その結果、各YMCAが数多くの折り鶴を持参してくれました。また、大会受付にブースを設けたところ、競技の合間に鶴を折ってくれる参加者も多数見受けられ、事務局の予想をはるかに上回る数の折り鶴が完成しました。これから事務局側で糸を通し、千羽鶴が完成したら、平和記念公園の「原爆の子の像」周辺に奉納したいと考えています。

参加した子どもたちが、また水泳を頑張りたいという気持ちを持ち、大好きな水泳ができる環境は平和な社会があってこそということを感じてもらえたのであれば、運営に携った広島YMCAのスタッフ・リーダーとしても、とてもうれしく思います。
広島YMCA 田中 信也

●「第60回名古屋YMCA市内中学生バスケットボール大会」を開催——名古屋YMCA

1957年にスタートした「名古屋YMCA市内中学生バスケットボール大会」。多くの人たちの協力により、今年で60回の節目を迎えることができ、男子の部・女子の部合わせて204チームが参加し、8月上旬に名古屋市内8つの会場で熱戦が繰り広げられました。



トスアップで女子の部スタート

校庭の片隅で、ゴムボールを使ってプレーすることが一般的だった時代、体育館のフロアでプレーすることは、中学生の夢であり憧れでした。そこで、1955年に完成した名古屋YMCAの体育館を活用して中学生の夢をかなえようとYMCA主事と名古屋市小中学校体育連盟バスケットボール部長の伊藤鈞先生により大会が計画されました。

しかしながら、当時は文部次官の通達により中学生の対外試合は、教育委員会が主催するものに限られており、大会開催の許可はできないとの対応でした。大会実施に向け、何度も足を運び、①バスケットボールはYMCAにて考案され、世界中に普及した競技であること、②ゲームの形態が少年の体育の増進、スポーツマン精神の涵養に重点が置かれ、教育効果に優れていること、③YMCAが体育館を開放し、市民の体育活動推進に貢献することを願っていること、の3点を強く訴え、その後、指導主事として市教委に在籍された後藤繁先生の提言もあり、ようやく開催に至ったとYMCAに残る資料に記されています。

先人たちの熱い思いによって創出したこの大会は、今、バスケットボールを愛する多くの人たちによって引き継がれています。第60回の今大会では、男子の部は日比野中学校、女子の部は長良中学校が優勝を飾りました。7日間にわたる試合を通して、精一杯プレーする中学生の姿が随所に見られ、勝ったチームにも負けたチームにも、勝敗を超えた学びがあることを実感させられました。

これからも大会の歴史、思いを大切にしながら、多くの中学生の成長の場となる大会にしていきたいと思ひます。
名古屋YMCA 牧 賢範

100 YWCA 100 YWCA YWCA 東山荘 次の100年に向けて ⑥

「イエスの教えを実践する青年の故郷として」

昨年11月、スプリングフィールド大学（前身はYMCA主事養成学校）のクーパー学長が「東山荘100周年記念感謝礼拝／シンポジウム」に来荘し、YMCA理念の今後の方向性はHumanics（人間学・人間力）であると話されました。YMCAを表す赤三角（Spirit-Mind-Body）に、さらにSocialを加えた全人教育を提唱し、「バスケットボール」を生み出した同大学の現在のゴールは「隣人に仕える人格・人間力を形成することにある」と語っていただきました。

同シンポジウムでは、立教大学名誉教授の坂口順治氏が「社会的福音運動がYMCAの行動哲学であり、東山荘は『YMCA人』醸成の場であれ」と話され、山田公平前総主事は国内外のユースが東山荘での研修に参加する『地球市民育成プロジェクト』に触れ、ユースは「世界と共に生きる地球市民たれ」と、また島田茂総主事は100年前の東山荘献堂式での廣岡浅子の祝辞を引用し「クリスチャン青年は社会変革の旗手たれ」と、それぞれの方がこれからも東山荘を拠点に行われる青少年育成への思いを語りました。

東山荘の100年は、理想を求める歴史でした。その時代の社会が神の国に近づくために行われた聖書の学びと実践、集う者が友情を築き、一つとなっていくという体験の日々でありました。学生YMCAの夏季学校においても、SCM（学生キリスト教運動）の高揚と左翼化、全共闘運動の影響による解体などを経て、昨年の「第43回全国学生YMCA夏期ゼミナール」には113人が結集し、復興の歩みが始まっています。

キリスト教の価値観と出会うことによる自己形成、新しい自分が変わっていく喜びの共有は、時代のうねりに左右されず、真理の世界を求めるところにあります。この先人の人間力こそが、信仰と社会実践を一致させていくキリスト教青年運動であったと、この100年の歴史は語っています。

全国のYMCAおよびワイズメンズクラブ、関連企業の方々からの募金が寄せられ、新本館が建ち上がりました。全国YMCAの一致を証する場、学びと交流を共にする拠点であり、青年たちの居場所である東山荘が再生に向かって今、歩み始めています。



「2016地球市民育成プロジェクト」夏期研修で、東山荘に集まった国内外のユース

YMCA東山荘所長 堀口 廣司

○「YMCA東山荘100年募金へのご協力をお願い」ご寄附は日本YMCA同盟HP内のサイトで受け付けています。https://srv.asp-bridge.net/ymca/index/

2016年度 世界YMCA/YWCA合同祈禱週

世界YMCA・YWCAでは、11月の第2週目の日曜日からの1週間を合同祈禱週として、毎年一つのテーマのもとに、聖書からメッセージを読み、祈りを共にするときとして定めています。今年は、11月13～19日の1週間、「誰も置き去りにしない」というテーマのもとで祈りを合わせます。日ごとの具体的なテーマと参照する聖書の箇所は下記の通りです。

テーマ	誰も置き去りにしない
日程	2016年11月13日(日)～19日(土)
第1日	誰も置き去りにしない ルカによる福音書 10章25節～37節
第2日	「セーフ・スペース」をつくる ルカによる福音書 15章8節～9節
第3日	私たちのリーダーシップを変革する コリントの信徒への手紙一 1章26節～29節
第4日	尊重、支援、そしてエンパワメント(女性に対する暴力) 創世記 34章1節～7節
第5日	私にも価値がある ～人は一人ひとり異なる能力があるから コリントの信徒への手紙一 12章4節～11節
第6日	あなたの手の中に ～児童婚を終わらせるために ルカによる福音書 11章33節～36節
第7日	誰もが神の似姿として平等である ルカによる福音書 15章3節～7節

○「世界YMCA/YWCA合同祈禱週」ブックレットの内容は、10月下旬に、日本YMCA同盟HPにて紹介する予定です。